■私の文学世界

河林　満

純文学と大衆文学に、いまの日本社会では小説の質がふたつにわけられていますが基本的にいえば、いい小説と悪い小説、があるにすぎないのだと思います。黒岩重吾氏は、感動と衝撃と余韻が残るのがいい小説といわれている。わたしもまったく同感です。

しかし、一応の考え方として、純文学の定義を求めるなら、それは人間の内面の真実を追及するという創作の在り方といえるでしょう。それと比較して、大衆小説（エンターティーメント）は娯楽・物語性に重点を置くものとして考えられる。

わたしは純文学作家です。幼児における実母の死とそれがもたらせたものを思索するところから、創作を開始しました。いわばそのことが自分にとって切実であったからであり、自分に切実なことを書くことによって、乏しい才能も開かれていくのではないかと考えます。

作家は社会の中でテーマ（書きたいこと）に目覚め、社会の地熱によってそのテーマを孵化させていくものだと思うわけです。

その意味では誰もが小説を書く可能性を秘めているわけで、優れた新人の出現を期待せずにはいられません。